

日台にとって大事な慰霊碑の一日も早い復興を！

高砂義勇隊慰霊碑の惨状

青年部長 杉本 拓朗
すぎもと たくろう

倒木と落石に埋まる義勇兵銅像

去る八月八日、台風十三号が台湾を襲い、台北市内でも木が根こそぎ倒されるなど各地で甚大な被害が出た。その中でも烏来^{うらい}の被害は甚大で、土砂崩れで道路が寸断され、軍隊や消防、日本のNGOが出勤するほどであった。

台風から半月ほど経った八月二十四日、折しも青年部の台湾研修ツアーを終えて帰国するその日、高砂義勇隊慰霊碑の現状を確認すべく烏来に向かった。MRTで新店駅までゆき、そこからバスで烏来まで行くこととする。案の定、途中の清水巖で、ストップとなる。ここからは大きな車輛は通れないらしく、清水巖で新北市政府が地元民

用に用意した二十人乗りのバスに乗り烏来まで行く。

もっとも、そのような情報はどこを調べても、またバス停にも一切出ていない。そこで、新北市烏来区と共同で慰霊碑を管理している「高砂義勇隊記念協会」の総幹事をつとめる馬偕^{マカイリムイ}理牧氏と連絡を取り合いながら、何とか烏来にたどり着いた。

烏来のバス停の待合所は川の上にせり出たように建てられている。台風の時はいまじい雨量のため、川原から一〇メートル以上はあるこの待合所の床の部分まで水が上がったようだ。その時の名残で、手すりが破壊されたままになっている。

烏来からは馬偕氏のバイクと一緒に



慰霊碑の後の山に土砂崩れが起こり、半月経ってもビニールシートがかけてあるだけで復旧は進んでいなかった（8月24日、烏来）

乗り、瀑布公園に連れて行っていたいた。半月経っても、道路には大きな岩がまだ放置されたままだ。

瀑布公園周辺の道路は応急処置でアスファルトではなくコンクリートのよくなもので舗装され、公園入口は土砂で埋まっている。上を見ると山の地肌が露出しており、そこから土砂が滑り落ちて来たことが分かる。

別の入口から倒木を避けながら遠回りしつつ、山の斜面の石段を登ってようやく慰霊碑近くにたどり着く。慰霊

碑前にあった鎮魂の鐘はそのままだったが、鐘の後にあった慰霊碑は完全に土砂で埋もれていて確認の取りようがない。その近くには慰霊碑の上に鎮座していた高砂義勇兵の銅像が無残にも転がり、倒木と落石に埋まっていた。

台湾の歴史を学ぶ大事な場所

馬偕氏にお話を伺うと、朝四時から七時くらいにかけてものすごい暴風雨で、九時から十時ごろにかけて土砂がずると滑り落ちてきたという。未

だに地面が安定していないため、落ちてから惨状について確認したいとのことであった。

慰霊碑入口の左手に置かれたさざれ石や「鎮魂の碑」など、関連する石碑などは土砂に埋もれておらず無事であったが、慰霊碑建立に尽力した日本人の故伊庭野政夫氏の胸像は暴風にやられたのか、台座から落ち、ブロックの一部が崩れて倒木が散乱している中に埋もれている有様であった。

この慰霊碑には最近、台湾人の大学

生や高校生が訪れ勉強をしに来ていたという。台湾の歴史を学ぶために自主的に訪れているというのだ。

今までは日本人が主となって訪れ、英霊となられた戦歿高砂義勇隊の方々を悼み、感謝を捧げてきた。しかし今は、日台にとつての大事な慰霊の場所であり、歴史を学ぶ場所という本来の役割を果たしている。

日台の絆を象徴し、台湾の歴史を学ぶこの大事な慰霊碑を一日も早く復興させたいと強く思った。(表紙4参照)



李登輝元総統が「靈安故郷」と揮毫された高砂義勇隊慰霊碑（2014年5月16日撮影）



土砂に埋もれた慰霊碑を茫然と眺める馬偕理牧氏。義勇兵の銅像は転がり落ちて土砂の中に埋もれていた。



関連石碑などは無事だったが、ブロックの一部は崩れ、胸像は台座から落ちて倒木の中に埋もれていた。